

愛・教育愛とその脳における仕組み

—大脳生理学に学びつ（其の二）—

富 永 義 彦

'eros' and 'paideia'

observing the recent informations of the brain physiology (part 2)

Yoshihiko Tominaga

序	1— 3
§ 1. 愛 eros について	3— 6
§ 2. 愛 eros の源・大脳辺縁系	6—10
§ 3. 愛 eros と教育 paideia	11—14
—教育における愛・福祉における愛—	
結	14—16

序

「人間・生命の理解—大脳生理学に学ぶ（其の一）」¹に続いて、本論稿は人間における愛・教育における愛を、新たな脳生理学の知見に支えられつつ、考案・再構築してみたいと考える——この事へのささやかな端緒の作業になれば——と希いつつ。

「人は、脳によってのみ、歡びも、楽しみも、笑いも、冗談も、はたまた、嘆きも、苦しみも、悲しみも、涙のでることも知らねばならない。特に、われわれは、脳あるが故に、思考し、見聞し、美醜を知り、善悪を判断し、快不快を覚えるのである。」²

前稿に於ても、たべ、交わり、い群れておれば嬉しくもあるか！われら人間の共々なる、合せ・福祉を目ざしている生活の基盤に、それらをつなぐ共存・愛の場の力として働いている所の *Skin-ship* をとりあげた。³

爽やかなる共存！即ち福祉の基盤に共存・愛があるとせられようか。

この人間らしい或は人間くさい愛を、その最も自然なるすがた、エロス *eros* にことよせて眺め、つかみなおそうというのである。

「エロスでは足りない、ひくい、アガペー *agapē* でなければならぬ」との高らかな声が、「聖霊」をかざして叫ばれると、率直にいつて些か当惑(!)することもある。

ことは又、「教育愛」についても同様で、それは教育活動の根源或は基本的要素となるもの（なっているもの）であるではあろうが、教師は聖職・聖職者であるとした言挙げが選挙がらみなどでなされだすと、百家争鳴ということになりかねない。

はたしてそれはいかなることか？自ずから然かある、おちついた理解もえられないものであろうか？。

近来いよいよ教えられる所の多い、新たな脳生理学の、「自然」科学たる、端的な(sachlich)知見に、興ひかるるままに、ひきつづき、この人間くさいテーマに、及ぶ限りあたってみようとした次第である。愛？人間愛？教育愛……？

「……愛することは、誰もが自分自身によってのみ、そして自分自身のためにのみもつ事のできる個人的な経験なのである。実際、この経験を、少なくとも児童、青年、成人として、痕跡的な仕方にしても持たなかった人は殆どないであろう、愛の実践についての討議がなしうることは、……そのあるがままの愛への接近を検討し、……論議してみることなのである……」⁴

又、「……人びとは愛にあこがれを抱いている。幸福な愛の物語りをつづる数えきれないほどのフィルムをみつめたり。愛をうたういく百のたあいなき歌に耳を傾けたりしている。」と E. Fromm もいう。「しかし愛するためには知識と努力とが必要となる。学ぶ必要のあるなものかが愛についてはあるのだということを考える人は、ほとんどないのである。」ともいっている。⁵

その「愛」の事実を支える理論は何か？

次に本論稿について離れない方法的視点であるが——これらの人間らしい或は人間くさい経験—体験と脳生理学の示す知見とのつながり・端的な対応を実感できる著るしい—視点を例示すれば——

「この意識の水準を支えている賦活系 **activating system** の中心である網様体 **rete** には自動能はなく、感覚神経路からでる側枝を通して流れこむ感覚のインプルスによって、その活動が駆動され維持されている—。従って、感覚刺戟が強いと意識の水準はあがり、刺戟が弱いと意識の水準はさがるから、私たちの目ざめと眠りは、感覚刺戟の量によって規定されている——。

実際に、この Magoun の構想は、私たちの日常の体験にてらしてもよく納得がいくし、動物や人間で網様体を電気刺戟すると、眠っているものは目ざめてき、目ざめているものは、いっそう意識が明晰になるのである。また、脳波のパターンも、それに対応して眠りから目ざめのパターンに変る θ 波 \rightarrow β 波。」⁶

このような意識・心にかかわることがら Sache の理論と体験・感覚・感情とのサナガラな対応・対照をこの愛にかかわる論稿に於てもさぐりあて、定置したいと考える。

すなわち、例によって、端的な人間の体験の示すものの、直視・観照・味得を土台・手がかりにしつつ、愛ついで教育愛の流るる構造を、脳の生理がいかに示してくれるか——その対応・対照・考察の作業を些かこころみてみたい、自ずから然かある、**natural** な源泉をつきとめてみたいというのである。

その大まかな理論の順序は、

§1. 愛 eros について

§2. 愛 eros の源・大脳辺縁系

§3. 愛 eros と教育 paideia

～教育における愛と福祉における愛～

となるであろう。

注

- 1 東海学園女子短大紀要, 第12号, 1977. X.
- 2 全上, p.99.
- 3 全上, p.104~105.
- 4 E. フロム著・懸田克躬訳愛するということ p.150~151.
- 5 全上, p.1-2.
- 6 時実利彦, 脳の話, p.195~196.

以上が本研究の目する所の要旨である。教育30年, 児童福祉10年, 計40年の人生をへ, 哲学・教育学・社会福祉論とたどるうち, さきにちえおくれの子の施設に働いた機縁から思いもかけなかった大脳生理学なるものに, 興味ひかれ, その事についての誠にささやかな研究発表を一昨年福岡の地で行った。

今に想えば, わが30年の教育実践も, 私にとってはわずか10年ほどであった社会福祉事業なるもののうちに含まれる, 限りなく広ろやかな人生事業——否, 人生活動そのもののうちの, 極めて重要な一機能にかかわる仕事であったと思われることである。

本年度本研究の発表は, 8月30日, 日本教育学会S福祉と教育の部会において, 上記3章のうち, §1.—§2.を, これにあて, 9月23日, 日本福祉学会, VI社会福祉教育部会において, 同上, §2.—§3.のテーマを, これにあてることとした。

両学会の会期日の順序が逆であれば(!)私の論文構成からの理論的筋道にも, よりピッタリ (!!)であったのであるが, 関連領域, 否, 不可離の係わりをもつ児童福祉・教育の仕事への言あげとしてことのご諒恕を賜れば幸甚である。

§1. 愛 eros について

エロース, erōs, ὁ ἔρως ← ἐράω

① a) Liebe,

insb. sinnliche Liebe (官能愛),

Geschlechtsliebe (性愛), Wollust,

Buhlschaft (情事).

übh. Lust (快楽), Wonne (無上の喜び, 歡喜, 純一な幸福感);

Begierde (情熱, 切望, 欲情),

Sehnsucht (憧憬), Wunsch (希望),

b) Gott der Liebe, Eros, It, Amor

= Sohn der Aphrodite, als
schöner, geflügelter Knabe
mit Bogen und Köcher gedacht,
(Menge-Güthling, Griechisch
-deutsches Wörterbuch, 1913~S. 289)

② erao, ἐράω

a) leidenschaftlich (激情もて——つよく, 遅ましく),
zärtlich (やさしく, こまやかに) oder
innig (心から, やさしく, 誠実・親密に一ホノボノ, さわやかに) lieben.

b) übh, nach etw, verlangen (欲求),
sich sehnen (憧憬, 恋慕),
begehren (熱望)……,
(Menge-Güthling, ibid. S. 283)

この愛, ギリシア語のエロスについての語釋は, いかにもいづれも自然であって, ゆたかな中身と, それらのかかわりを思わせる。

さて, ではそれらを手がかりに, 生まな愛のことがら, eros の Sache に移ろうか。

先日のことであった。(S53・2・9) 私が‘同期の桜’とたわむれ呼びかけている K さん——つとめさきのスクール・バスの運転士さんが, 学校の廊下でバッタリ出合った私に言いかけられた—「先生! 娘を嫁にやったら泣けてきますネ!!」と。愛別たちがたい父娘の情, こみあげてくるものを。

わが国哲学界の耆宿, 西田幾多郎博士を, さる夜訪ねた門下生は, 老博士が白煌々の電灯の下, テーブルに高等数学の書をひらき, 身じろぎもせず, その難問解決に沈潜せられる姿に接した事があった—即ち, 令嬢を亡くされた直後とのこと。

「不屈の意志力をもって感覚・感情を抑圧」されている。「悲しみをかみしめ, かみころして」おられる姿。¹ 絶ちがたきものへの何かすさまじき心の燃焼!!

「愛なんていない, と思いつめていた時代がある。少年のころだ。なぜだったろう。

愛をうけて, その愛を失うのがこわかったからだ。三才の時, 祖母が死に, 六才の時, 父が死に, その翌年ひきとられていった, 母方の祖母が死んで母を除く直系の尊属はすべて死に果てた。その人たちを失うことは愛を失うことだった。もう, 愛はいらないと思った。失うこと

がこわかったから。

私は小さな動物のように身をすくめて生きていた。たった一人残った母の愛を〔も〕拒否していた。それでも母の愛はふりかかる。その愛を愛と思うまいと思っていた。

友情もほしくなかった。それは愛の変型だと思われたから。

年頃になると、当然のことだが異性に惹かれる。それでも惹かれていないと自ら偽った。向うが惹かれているのだと思いたかった。そのくせ向うが愛しはじめるとつっぱねた。

愛なんかいらぬ。愛なんかほしくない。愛なんかなくても生きてゆける。呪文のようにとなえつつけていた。

そのくせ、一人で住む五階のアパートの一室にガッと夕陽がさし、見おろす家々がマッチ箱のように夕餉の煙をたてはじめる時、さびしさに私は泣いた。

人は愛なしには生きていけないと、それから二十年以上経った今つくづく思う」²

「愛なんかいらぬ！」と身をすくめ、心を殺し、つっぱねて、執拗にも愛をこぼみつづけた大島渚少年—青年の、にもかかわらずたちがたい愛の絆！そしてその糸のプツンと切れたあとなる悲しくもさわやかなる涙！

この涙は、自律神経が、大脳辺縁系—視床下部の奥深い、こみあぐる機能の指令のまま副交感神経に命じて、さわやかに洗い流してくれるカタルシスのそれでもある—身をこめて意固地にも拒否しつつける前頭葉前部の必死なる抑制・抵抗の機能の持続もついに崩れしあとの。

この事は、“のっくん”（弟6才）“たづるさん”（姉）とその父・高石ともや氏との、愛犬・甲斐犬“星のプルルン号”〔6才〕の末期に出あって、セキが切れてしまった涙のさわやかさにも相通りもの。³ 弟・姉・父……そして、なかま・家族である犬との間にも！

最後にいまひとつ、erōsの本場アテナイのそれをのぞいてみよう。——

「……そうして人々に皮肉を言ひ、からかって一生を送るのです。しかしこの人〔ソクラテース〕が大真面目でさらけ出した時に、内部の神像を見たお方があるかどうか僕はしらない。僕はいつか見たことがあります。その時僕は思ったのですが、それは非常に神々しい、黄金のやうに輝く、非常に美しい、驚くべきものである。だからとにかく、ソクラテースの命令には従はなければならないと。

そこで、僕はこの人が僕の青春に思召があると思った時に、僕がソクラテースに身を委したらこの人の知っていることは何でも聞けるのだから、これはめつけものだ、すばらしい幸運だと考へました。つまり青春にすばらしい期待をかけたのです。

そう考へたものだから、それまではボーイをつれずに一人でこの人といふことなんかしない

習慣だったけれど、その時はボーイを帰して一人で交りました——いや、皆さんには正直に申しあげなけりゃなりませんからね。しかし気をつけて下さい。そうして嘘言でもついたら、ソクラテス、やりこめて下さい——いや交りを結んだのですよ。皆さん、二人だけでね。そうして今にもこの人が僕に、恋する人が稚児さんに差し向いでしっぽり話しかけるやうなことを話さずだろろうと思って喜んだものです。

ところが、そのような気振りは更にはない、何時も僕と話をする時のように一日一緒にいただけで帰って行きました。

その後僕は、この人に一緒に体操して下さいと言ってそうした、その折に行く所まで行こうと思って。

さてこの人は一緒に体操してくれたし、人目のない処で何遍も相撲さへとったけれどよう言はんわ、それ以上のことは何もなかったのです。……」⁴

御曹司アルキビアデス対大豪 (!) ソクラテス様との、みごと且つおさかんな、濃厚なる (!) 稚児さんプレイ。Aphrodite の息子 (娘でなくて) が即ち Eros であるこの神話の国の生活感情がたくましい Skinship のバネの上に、流れ溢れている——これまた大脳辺縁系の深みからの情動と、前頭・頭頂・後頭葉からの智慧との、サカンなるからみあいの中で!

〔この稚児さん παιδίον, παῖς: paidion, pais のこと、それが παιδεία: paideiā, 教育ということに、係わり流れてゆくことは後の章のテーマ〕

恋愛・性愛・官能愛……若い age の大脳辺縁系—視床下部のそれぞれの中枢センターから湧き出ずるエロス中のエロスについては、ここに例話するまでもあるまい。

さてでは、§1. にかかげた愛・エロス或は共存のさわやかな心よさ、それらの源泉はいずこであって、又、如何様にであろうか?— §2. にうつることとしよう。

注

- 1 時実利彦, 人間であること p.87 p.132.
- 2 大島渚, 愛の悪循環を超えて—“愛”って何だろう, PHP. S. 52. 7. 1. p.6-7.
- 3 高石ともや, あのひとと苦勞をともにしてみたい, PHP. 全上 p.39-40.
- 4 プラトン, 饗宴, —プラトン全集, 第4巻, 岡田正三訳, p.94-95.

§2. 愛・エロスの源 大脳辺縁系

さて愛・エロスをこめて、人間生命・生活の基本的活動を推進するもの——その名は大脳辺縁系 limbic system——大脳半球の内側面と底面の奥深い部位にあって。

〔大脳辺縁系で形成され、営まれる運動〔行動〕や感覚〔感情〕は、個体維持と種族保存の営みを推進する。本能的な心の形成と具現に直接に関係している。(……〔 〕は筆者)

旧皮質 paleo-cortex や古皮質 archi-cortex [大脳辺縁系の中樞皮質] から出る下行路が、内臓器官の働きを統御する自律神経系 automatic nervous system の中枢的役割をしている視床下部 hypothalamus で、中継されていることから、大脳辺縁系は自律神経系に対して、さらに上位から調整的、統合的に働きかけていると考えられる。

かくて、大脳辺縁系の一番特徴ともいふべき働きは、個体維持と種族保存の基本的生命活動をば、おのずと湧き出て来て [一つには] たくましく、[かつは又、相より相つどい、協力の実をあげて] 推進する欲求の心を形成する [している] ことである。本能とよばれている心であって、食と性と群居 (集団形成) etc の本能の心 [とその運動・行動] の座と考えられている [それ故に私は、本能=基本的能力というのである。]

これらの本能の心は、視床下部を通過して上行する感覚のインプルスや、[自動能たる] 視床下部にある体液の変化を感受する細胞群から上行するインプルスによって、形成され、[input] ,

そしてその心は、皮質下核や視床下部や中脳を通過して下行する運動神経路によって運動・動作として具現される。[output]

これらの本能的欲求が満たされるか否かを知る心……快感と不快感……怒りの心。[例えば、窒息感、睡眠不足、渴感、空腹感、空聞感、孤独感……恐怖・不安感] このような心の動きが情動 emotion。実は大脳辺縁系がかかる情動形成の座。情動脳とよばれている。[そしてそこからたくましい生への行動へ、欲求不満をみだし欲求を叶えようとする衝動へとかりたてられるのである。]

基本的生命活動の推進に結びついている心、基本的な心、素朴な心、素朴な意識。

H. Bergson のいう「内密の自我」S. Freud のいう「深層の心」。新皮質 neo-cortex で形成される精緻・微妙・明敏な意識に対して素朴な意識。¹ かかる基本の能力・心・行動に、ヒトにあっては、進化・発達した新皮質・上からの選択・修飾・+と-の調整も加乗されているという次第。

食・性・……群居(集団形成)。基本的生命活動、それらに伴う快・不快…怒り、恐れ、情動の心。それらの発現の機序は：情動の心・体験は大脳辺縁系で形成され、その表出・行動・反応は視床下部の統合的仕組みによって実現されている。大脳辺縁系と視床下部におけるふりわけとされる場所。² それぞれに興奮と抑制の相補的センターに分かたれつつ、例えば空腹と満腹との中枢というのが如く。

かくてそこに多彩な、生活の心における反応効果が機能・現出されてくる、一つには、生きがよい、生気にあふれる活力。素朴な生々たる生命感。爽やかな、快適な、或はしみじみとしたやさしさ……静かな呼吸、心臓のプルスもおちついた流動 etc. para-sympathetic nervous system 副交感神経或は迷走神経のはたらき。視床下部前部なる向栄養帯から指令されつつ。

生命活動の中心，生命活動性の基本基調がそこに流れ出す。

二つには又，要すれば，手に汗，拳を握りしめ，顔色をかえ，……心臓の鼓動も激化，血圧も上昇……怒髪天を衝く……烈しさ。視床下部後部なる向勢力帯の動員，いわば戦闘配備，sympathetic nervous system 交感神経系の発動の場面も。³

さて，以上の機能配置・機序を土台におさえつつ，われわれのテーマ・爽やかな共存・エロス（愛）へと集中しよう。

「最後に群集欲であるが，飲，食の行動や性行動〔etc〕をより能率的に〔より快適・より安らか，より幸福に〕営むために欠くことのできない欲求の心である。動物はもちろんのこと，私たち人間も，家族・グループ・社会・民族……といったように，形式や規模は違うが，お互いに相寄り相集うて集団生活をしている。言葉や皮膚の色が同じだとかいうことが理由ではない。お互いに群集欲という本能的な心をもっているからである」⁴

「いがみあいながらも，いっしょになって生活しようとしているし，……集団欲は，私たちがたくましく生きてゆくためにはいちばん重要な本能なのである。

集団欲がみたされたときに，一心同体の感じや心の連帯を覚え，心が安定するのであるが，そうでないときに淋しさや孤独をかこつようになって，心が不安定になる。

集団欲の重要さは，孤独な環境におかれた場合や，実験的に孤独環境のなかで生活させた場合，（隔離実験，感覚遮断実験）身体や精神に異常がおこることによってたしかめられている。

北極に 164日間ひとりでいた C. Ritter 女史の不安・錯覚・幻覚。

ダイコクネズミの 6～12 週間隔離に伴う粗暴化，皮膚炎症，副腎や甲状腺の肥大，脾臓や胸腺の萎縮……。」⁵

逆に，ネコの視床下部の後部（乳頭視床路と脳弓の間）を刺戟すると，相手に近よる行動をおこすという中尾の実験（刺戟実験），また大脳辺縁系を破壊すると，動物の社会的行動に変化があらわれるという観察，雌ネズミの両側の前帯状回（大脳辺縁系の中間皮質）をこわすと，子ネズミを育てなくなるという観察（破壊実験）……それらは，群居あるいは哺育本能と，それらの大脳辺縁系における形成の座とのかかわりを想わせる先駆的実験・観察なのであろう。⁶

「動物の群の形成。ウマやサルやゴリラのような草食動物では，群の構成員が多く，群の定住場所（巣）がない。オオカミやライオンのような肉食動物では，群の構成員が少なく，群の定住場所がほぼきまっている。……大脳辺縁系による群がる本性が，かれらの新皮質系の……適応行動によって修飾されたためであろう」⁷

「人間の群の構成。新皮質系の適応・創造行動による多彩化。……しかし、家庭という巢をもった家族が、人間集団の構成単位であることは脳の仕組みからも否定できない。生きているいのちの保障・睡眠・休息・排泄の安全な場所。はばかりことなく、安らげく、食事・性・集団欲のみたされる場所。保育と相互啓発・向上の場所。心のうさ、痛手をいやす憩いの場所……。」⁸

さて、「食欲は食べることによって、性欲は交わることによって、集団欲は群がることによってかなえられる。群がるとはただ集まるのではない。お互いの間に心の交流があること。視覚や聴覚……ことばや文字を活用しての心の交流。

ところで、目もみえない、耳もきこえない、口もきけない、生れたばかりの赤ん坊がお乳を欲しがると同じように、無言のうちに集団欲をかなえてもらうことを要求している。お乳によって肉体の栄養は保障されるが、もし集団欲がみたされなければ、精神の栄養失調をおこす。赤ん坊の心を不安定にし、性格をゆがめ、非行性の芽ばえにも……。

では、赤ん坊の集団欲は、どんな手段でかなえてやれるか。その一番基本的、効果的な手段は、皮膚や粘膜の圧迫、即ち肌のふれあい、スキンシップ Skin-ship である。百万言を使うよりも、どんな視聴覚の方法よりもより効果的に、お互いの心を一体化し、心の連帯を文句なしに作ってくれることは、日常の生活体験。〔愛のすがた！〕

意識もさだかでない重篤な病人と、何とかして心を通じさせたいと願うとき、私たちはしらずしらずのうちに——病人の手を握りしめ、腕や脚をさすったり。〔おのずと湧いてくる心！〕

サルを群からだして一匹にして飼うと、精神的に不安定になるうえに、自分の身体の毛をどんどんぬいてゆく。わが身の毛づくろいで代償的に集団欲を。

赤ん坊をしつけるにも、子どもを教育するにも、親と赤ん坊、子どもと教師の間で、心の連帯がなければ効果は期待できない。……精神薄弱児の教育は、抱きあい、頬ずりしながらの教育であるというし、重症の小児自閉症の子どもも、つぶれるほど抱きしめてやると、こっちに顔を向けてくるという。手をとって教え、手塩にかけて鍛える……の言いか。⁹

以上あまねく時実教授の知見を土台に、愛—共存の流るる原点をみた、たくましく *leidenschaftlich* 又ホノボノとやさしく *zärtlich*、福祉乃至教育の源流がそこに、*limbic cortex* の深みから流れ出でているのである。

§1. 愛 eros について、におけるいくつかの例、——Kさん、西田博士、親と娘、大島渚少年～青年と祖母二人、父、友人、恋人…… etc, 甲斐犬“星のプルルン号”と“のっくん”“ちずるさん”“高石ともや氏”——そして大豪ソクラテース先生とアテナイの若殿原アルキビアデス、さらにシュンポシアン饗宴につどい語らうパイドロス、アガトン、エリクシマコス、パウサニアス、アリストデモス、アリストパネス級の諸君子人たちのエロスの物語り……それらの明と暗との光源の深みを、それらの人たちの大脳辺縁系と視床下部のそれぞれの働らきに定置せんとした、ささやかな私の作業をひとまづ結びたい——すべてを時実教授の脳生理学に負いつつ。¹⁰

ともどもに仕合わせ（福祉）に生き、ともどもに啓発されあってゆく教育のみち、それらは爽やかなる共存—愛 eros の支えのうちに流るるもの、たくましく又相より相つどうて。もとよりそれらは社会といい、自然という不可離の環境のもとに於てではあるが。

否さらに、個体維持と種族保存の基本的生命活動といわれる——個人はもとより、社会であるすがたそれ自体が、かくして自ずから然かある、自然なる脳の仕組みに、相つらなって源泉することが（していることが）、自ずから明らかであると、いわれねばなるまい。「天然、自然のうちの一部として生きる」と心しずかにいわれる所以であろう。¹¹賢しらにも機能する知性の座をも抱きつつ。

注

- 1 時実利彦、脳の話 p.133-135, 140-141.
- 2 同、同、p.151-155, 166-167, 富永、人間・生命の理解 §1 p.4-5.
「飢え」の怒り、ここは脳生理学の分析であるが、栽培したトモロコシをも運びさられて、餓死児もつづく、アフリカ、ケニアの子どもらの怒り……叛乱の事を附記しておく。
S.53, 8, 31, 第37回日本教育学会、楠原報告—「第三世界と近代の子ども観」シンポジウム要旨集p.29.
- 3 同、人間であること p.86.
- 4 同、脳の話 p.149.
- 5 同、人間であること p.69-70.
- 6 同、脳の話 p.149-150.
- 7 同、人間であること p.71-72.
- 8 同、同、p.72-74.
- 9 同、同、p.75-79, 富永、人間・生命の理解 §2 Skinship. p.6-7.
- 10 プラトン、シュンポシアン、饗宴、(前掲書) p.97.
- 11 田村一二、「ちえおくれと歩く男」p.17-8, 123-124, 134.

§3. 愛 eros と教育 paideia

——教育における愛・福祉における愛——

前章ですでに、愛—さわやかなる共存の源泉を、われわれひとりびとりのうちなる自然、「個体維持と種族保存の基本的生命活動」の座、大脳辺縁系 limbic system の皮質部分と皮質下の部分の機能のうちに定置することができた。

いくつかの愛のすがた、従って自ずから、愛情飢餓、精神の栄養失調、非行への芽、重症心身障害児の福祉と教育といった事例へも、事がらは自ずから連なり流れて行った。

さて、上に第一章において愛をギリシアの eros に事よせて辿った流れから、ここで今いちど、eros 物語りの圧巻、プラトン Symposium 「饗宴」篇における、愛と教育との、花々しくも生氣あふれるつながりを、とりだしてみよう。

「……もし他人の財産を貰おうとか支配しようとか何か他の力を得ようとかいう意志で、恋する者が稚児さん paidion, παιδίον にするようなことをするならば、つまり哀訴歎願し、誓詞を立て門の前で眠ったり、奴隷だってしないような屈辱的な行為をするならば、味方も敵もそんな行為をすることを妨げるだろうからね、つまり敵はその阿諛・卑屈をののしり、味方はこれを匡正し彼等のためにそれを恥辱と考へて——ところが恋する者はそんなことを何をしても大目にみられ、実に美しい行為だというので非難をうけないで……認められている。……中でもはげしいのは、……誓詞を立てて恋する者にだけはそれを破っても神様方の御宥恕がある——恋の誓いはないんだってさ。……この国では恋も、恋する者と睦みくすることも誠に美しいこととせられておる……この国の制度・習慣……。」¹

この恋愛 eros の途方もない遮二無二なることよ。大脳の深部辺縁系——視床下部——自律神経系から、抑えがたく、こみあげ湧き出ている！ しかも又それらの力のバネの上に、次の流れが……。

「エロス様は……吾人に此上なく善い者を授けたまう。……年まだ若い頃には親切な求愛者にまさる善い者はなく、また求愛者には稚児さん paidion にまさる善い者はない。何故かと申しまするに、美しく一生を送ろうといたしまする人間を一生涯導きまするもの、それをば、親族も名誉も富もその他何物も、恋ほどに美しく植えつけはいたしませぬ、そは何を意味するか。

醜きものを恥じ、美しきものに憧^{あとが}れる心でございます。これなくしては国家も私人も美しき大事業の完成は適^{かな}ひませぬから。かくて私は断言いたします、恋する者は何等か恥づべき行為があつて暴露し、又は他人から屈辱を被つても臆病なるが故にそれを免れ得ないことが知られる場合、父親に見られようとも、友人そのほか何者に見られようとも、稚児さんに見られる場合ほどには苦しみませぬ。

同じことが又恋せられる側にあっても見られまして、彼等は何等か恥づべき行為の現場を見られる場合、特に己を恋ひ慕う者に恥じるのでございます。もし……求愛者と稚児さんの国家或は軍隊が構成せられますならば、〔薩摩の国の私学校、田原坂の美少年……といった所か〕彼等はあらゆる醜態をさけ、お互いに面子を重んじ合ふが故に、その国家をこよなくうまく治めるでしょうし寡兵よく全世界の人間に勝つとのこと。

恋する男は、落伍し、武器を投じた場合、他のすべての人々に見られるよりも稚児さんに見られるのを厭ひ……、それよりも死をえらびます……。」²

「さよう。恋する者にして初めて犠牲となって死ぬことを厭ひませぬ。ただに男ばかりと言はず女も亦。この説のためには、その満足すべき証明をペリアスの娘アルケステスがヘラス人に与えております。彼女の夫には父も母もありながら、彼女のみが夫の為に死を厭はず、夫恋しさに彼女は両親に比して非常な愛情を持ち、両親はその息子にとっては路傍の人であり、親とはただ名目にすぎないことを明らかにしました。彼女はこの行為があったが為に、実に美しいことをしたとただに人間ばかりでなく神様方にも思われ、魂のハデスの国からの復帰、この恩恵を神様方は……指折りの人々に、しか与えたまはなかつたのに、彼女の行為を賞でたまへばこそ、その魂を呼び返されたのです。かくの如く神様方も恋の情熱とその徳とを特別に賞でたまう。……」³

愛・恋・eros の衝動力、推進力、たくましくも又美しく、われ一人又仲間の社会で、立派に生死すべく、行動させてくれる不可思議なる力がそこに直感・直視せられる。工夫・思慮と前頭葉の推進・創造の力も、この深みから湧き出てくる力のベクトルの流れの上で、ひたすらに発揮・追求されてゆく。愛乃至 eros の、人間形成における、何とたくましいバネであるとか。

以上のパイドロスの演説を頭に、シンポジウムされた拳句は、マンチネアの女、ディオチマにきいたし、自分もそう信じていると云って、ソクラテースが語る所の、「美における生殖一肉の場合も魂の場合も」に極まる。すなわち一

「何だとお考えになりますか、ソクラテースさま、この恋・欲望の原因は？……動物は四つ足でも羽のあるものでも、生殖欲にかられますと、どんな激情にそそられることでしょうか！皆病みついたようになってエロチックになり、先づ交尾するのに、次には子を養ひますのに、それらのために、世にも弱いものがとても強いのとどンドン戦ひ、犠牲になることをいとはず、自身は飢えに苦しみながらも子を養ひ、その他何でもしますよ。それから考えても、人間がそうするのはお判りでしょう。」⁴

「……さて妊娠しているのでございますから、醜い肉よりも美しい肉に一層魅惑せられますし、また美しい、気高い、素性のいい魂に邂逅いたしますと、その時は両方とても喜んで、彼はその人に、徳とか、善い人はいかにあるべきか、何を努めるべきかとかについていくらでも言うことができ、そうして教育をこころみます。……美に接してそれに交り、前から妊娠していましたものを産みます。そこに居てもはなれていても忘れず、産まれたものをそれ（美）と一緒にになって育てますから、そんな人々はお互いに遥かに大きい共同心と堅い愛情とを持ちます……。」⁵

「……とうとう恋愛の極致、豁然として一つの本来的な驚くべき美を……。それ自体として自己と俱にあり、単姿的な、永遠の存在であって、すべての他の美しいものはそれを何かの仕方ですぐに具へる場合に美しくなります。その結果、他のものは生滅しても彼のものは増減せず、また何事をも受けません。」⁶

そこでもし人がそれ等から出発して正しい少年愛によって登って行き、かの美を觀初めると、究竟に達するといっても宜しうございましょう。……これが恋愛への正しい道程です。或は正しい導かれ方です。……階段を登るが如く、一つから二つへ、二つからすべての肉へ、美しい肉から美しい義務へ、義務から美しい諸の学問へ、諸の学問から他ならない美自体の学問であるその学問に到達し、遂に美であるそのものを識るのがね。生活のこの境地にネエ！ソクラテスさま——マンチネアの女はそういうのだ——人間は美そのものを觀照しながら生きるべきなのでございます。……

今ではそれ等を見て夢中になり、……稚児さんを見て始終彼等と交り、できることなら食べず飲まずにでも彼等を見て交ってさへおればいい気なのです。……むしろ美・真実に接しているのですから、又真実の徳を産みそれを育てた後に、神様に愛せられ得ますし、……不死が彼にも許されるとは?!……

これが、ねえパイドロスその他の諸君！ジオチマさんの言ったことであり、儂の信じていることなんだ。……この話をね、パイドロス、何ならエロス様への讃辞とってくれたまへ。しかし何なら、それを何と名づけ、どう名づけようと構はない。」⁷

以上のうちに、ソクラテス・プラトーンにおける、少年愛・稚児さん愛を貫いて登ってゆくアテナイの市民～国民の教育 *Paideia* の原像がある。

この事の理論的まとめを、夭折されたわが先輩中川清氏の遺稿集「古典ギリシアの精神」（河出書房）にきくとしよう。

勇氣・祖国愛・労働・平等・公正・自制・智慧……これらの諸の徳 *aretē* は、ホメロス、ヘシオドス、イオニアの法、ソロン、クセノファネス、アイスキュロスを通してプラトンにい

たつて最も鮮かに且つ総合的に高められた所の、ギリシア市民の徳である。

「ギリシア人たちはつねにその生きる自己の社会に於て、真に具体的普遍的なる人間の理想型を求め、自己をこれとの生ける連関に於て見、そうして自覚的に、これに向つて生きるべく努力したのである。……古典時代の自由なる市民の理想型、高貴にして卓越せる人 *σ καλὸς καραθός* [うるはしくよき人] はすでにホメロス社会の貴族の理想。具体的普遍的人間の理想型の発展は、……より普遍的なる人間のノルムへの過程であり、“ギリシア人とはギリシア人の血統に属しているもののことを言うのではなくして、我々の人間形成 *παιδεία*, *paideia* にあづかるもののことを言うのである”とソクラテスをして言ひ始めしめるに至つた過程である。そしてギリシア文化を産んだ偉大なる天才たちは等しくかかる人間の形成を促し導く所の優れた教育者であると考へられる。」⁸

以上は、私にも旧師であられる出隆先生が、この中川氏の遺著に後記せられている如く、古典文献学の巨匠 W. Jaeger の *Paideia* 1936, *Antike und Humanismus* 1937 の研鑽から流れ出た「一貫した一つの力強くも美しい骨組」の一節であるが、⁹ その人間形成論 *paideia*, 教育理論の根幹に、生々たる *eros* の具体的普遍的生命が、師弟と朋友との間を、「生ける愛の連関」に於てつなぎ、流れ、たぎっていることを、上記のプラトンの原像 *Symposion* 篇に、生ま生ましくみてとる事ができるであろう。「堅き愛情と遙かに大きな共同心」へめがけて、たくましく美しく、愛 *eros* は生々しくもかりたてられてゆく。

注

- 1 プラトン, 饗宴, “*Το Συμπόσιον*, (岡田正三訳, プラトン全集, 第4巻) p. 26-27.
- 2 全 上, p. 18-20.
- 3 全 上, p. 20-21.
- 4 全 上, p. 76.
- 5 全 上, p. 80.
- 6 「是諸法空相。不生不滅。不垢不淨。不増不減。……(摩訶般若波羅密多心經)
- 7 プラトン, 饗宴, p. 82-85.
- 8 中川清, 古典ギリシアの精神—文化的創造における根源形態としてのギリシア文化 [河出書房] p. 214-217.
- 9 全 上, p. 307-308.

結

教育と愛, 遠いギリシアの稚児さん愛, 生ぐさくも花々しいご立派! なる人間形成 *paideia* を、我々の足もとのソレに結びとめてむすびたい、——即ち、伊藤隆二教授はいう——

『人間らしさの中核にあるものは、「やさしさ」と「思いやり」である。かかる心情は意図的ないとなみでは、どうにもならないものである。……お説教で、やさしい心情を育てることはできないであろう。それはひとえに教師自身が「やさしさ」と「思いやり」にみちみちて

いることが前提となる。

又、友人間の人間的結びつきが、子どもたちに「やさしさ」と「思いやり」を中核とした友情を育ててゆく。

これは意図的に可能なのではなく、無意識的なものであるところに特徴がある』¹

eros のひとつの顔、やさしさ、こまやかさ、心からのさわやかさ……われとひととの連帯感、一体感、われひとともにあり、おのずと湧いてくる、相より相つどうてゆく素朴なナカマの心。これらはさきに〔§1. §2〕しばしば指摘せられた所の、大脳半球の内側面、底面なる、集団形成の基本的能力〔本能〕の座、大脳辺縁系のはたらきとして位置づけられるもの。脳の発達・進化の極めて原始的部位、archi-cortex, paleo-cortex の働き。幼児や重度のちえおくれの子において、反って素直に、素朴に、人の心をうって流れ出ずる所でもある——いじらしさ、愛らしさ——。²

『混合教育は是か非かと問いつめられるたびに……自問してみる。しかし答は非常に簡単なものではないかと、この頃思うようになってきている。それは元来、教育は自然発生的な営みであったという発見にもとづいている。(すなわち)——

未成熟な子どもが、自分のもてる能力なり天分なりを、十二分に発揮することを願っているとき、それを叶えるおとなが必ずあらわれ、学ぶものと教えるものとの邂逅のもとで、教育はいつしか展開されていった。おとなとは親のことである。

その親が自分では手におえないことに気づくと、その道の先達に教を乞うことになる。先達らはそのような学びたいと願う子どもたちを集めて、ひとりひとりの能力と天分とを考慮にいれて、もっともその子に適した教育内容を用意し、また、もっともその子に適した方法をくふうして指導していった。

いっせい指導がよい場合には、それをおこない、個別指導が必要であれば、それをおこなった。そこには、少しも無理はなかった。

真に学びたい者と、その学習者の願いになんとかこたえていこうとする教師との出あいは何よりも優先していた。

寺子屋や私塾の記録をみると、「できる子ども」も、「できない子ども」も、机を並べて学んでいたし、また、足の不自由な子も、目のみえない子どもも、その子なりの願いをもって、他の子どもたちとともに、教師の前に坐っていたことがわかる。……万事おおらかで、また、仲むつまじかった。……どの子どもどの子も、自分なりにその能力や天分を発揮すればそれでよいのであって、くらべて……神経をとがらす必要もなかった。

子どもたちは教師の人格にふれ、……無意識のうちに感化されていった』³

以上も伊藤教授。これに私の寸言を加えて筆をおくとしよう。

それぞれにたくましくも、やる気のみえる子どもたち、わが子たち。父と子、親と子。師

弟，同学。村のナカマ。寺子屋や私塾の自然発生。

子どもの意欲。親，師匠の愛を基盤のけじめあるしつけ。そして仲間らしい感情の環境。
 いろいろな個性と条件の違った子どもらが，ソレゾレにやる気もて生きようとし，又仲間としてムレ集うているおのずからな環境。手を取り，体をもぶつけあって。

そこに流れている必死なものと，ホノボノと湧き出る連帯・愛の心の生きている場所。
 そうしたヒト乃至ヒトビトの生活・生命にとって，原初的基本的な能力・機能の座を，以上，脳の仕組みの「古く」して深い部位に指摘せんとする荒削りな作業で，今回の論稿も終わったわけである——教育乃至福祉の仕事の原点をたずねて。

—S 53・9・6 記—

注

- 1 伊藤隆二，教育ほんらいの姿を求めて —混合教育をめぐる—
 [書齋の窓 S.52, 5, 1—p.3]
- 2 田村一二，ちえおくれと歩く男 「人間全部のずっとずっと奥の方に昔々からあるようなまことに純粋な……喜びとはにかみ……(V章・人間愛について・(3)ほんね—p.120-121)
- 3 伊藤隆二，同上，p.5-6. なおこの家庭環境；ムレ・ムラの環境に係って，同上書p.19に中内敏夫氏の「村落と新学校」が，土佐・足摺岬に近い村落の「若衆宿」「ネヤド」について，調査・提言されているのも興深い。